

---

# 日本大学歯学部紀要

---

第 53 号 (2025)

日本大学歯学部



日大歯紀  
ISSN 1348-818 X

目 次

§ 研究論文

歯科患者向け英文記事の語彙レベル —特徴語と連語表現に着目して—

..... 吉岡千由里 1

§ 紹介・解説その他

体育実技科目における障害理解促進への取り組み

..... 佐藤紀子 9

**Contents**

**§ Original**

**Vocabulary Levels in Dental Articles for Patients: Keywords and Collocations**

Chiyuri Yoshioka ..... 1

**§ Miscellaneous**

**Initiatives for Promoting Understanding of Disabilities in Physical Education**

Noriko Sato ..... 9

# 歯科患者向け英文記事の語彙レベル —特徴語と連語表現に着目して—

吉岡 千由里

## Vocabulary Levels in Dental Articles for Patients: Keywords and Collocations

Chiyuri Yoshioka

### Abstract

This study examines the lexical characteristics of English for Specific Purposes (ESP) vocabulary in a corpus of dental articles for patients. Keywords were extracted from the corpus with AntConc, and vocabulary levels were analyzed with New Word Level Checker using the Scale of English Word Knowledge–Japanese word list. Overall, 61.97% of the keywords were at or below the university entrance exam level including basic dental terms, while 17.95% of the keywords appeared at the level over 10,000 words in the word list. Therefore, when acquiring dental ESP vocabulary, it is effective to focus not only on dental terms containing basic words but also on high-frequency dental terms that do not appear in general English word lists.

**Key words** : ESP, 語彙習得, 歯学用語, 特徴語, コロケーション

### 1. はじめに

本稿は、特定分野に特有の英語使用に焦点をあてる English for Specific Purposes (ESP) の観点から、歯学部生が専門入門期に習得すべき歯学 ESP 語彙の語彙の特徴を分析することを目的とする。具体的には、歯学専門雑誌に掲載された口腔の健康に関する患者向けの英文記事を例にとり、専門家が患者に向けて記述した英文記事で特徴的に使用される語を歯学 ESP 語彙として抽出して語彙レベルを分析し、ESP 語彙習得の観点から考察する。

専門領域では専門家集団がコミュニケーションを図る際に共通語的に使用される特徴的な英語使用がみられ、このような特定目的の英語は ESP と呼ばれる。これまでも ESP 教育の研究においては、それぞれの専門分野のなかで共有される語彙についての分析が積極的に行われ、分野特有の ESP 語彙を効果的に習得するための学習語彙リストが様々な分野で開発されている。さらに、個々の単語に留まらない「語句」の使用実態に着目し、専門分野における特徴的な英語表現を表す Multi-Word Expression (MWE) へと ESP 語彙分析の対象が広がっている (小山・水本, 2010)。

MWE は頻繁に出現する特定の「複数の語の塊り (cluster)」を総称する概念で、ある分野に特

微的な MWE を適切に使用することは、自然でかつ正確な英語表現につながる (小山, 2015)。また、単語の理解を自然な言語使用に近づけて文の理解へとつなげるには共起語 (collocation) の知識が重要であり、特定分野のテキストに頻出する共起パターンの学習は、学術テキストの理解を早める可能性が示唆されている (宮本ら, 2012)。

そこで本稿では、口腔の健康に関する患者向けの英文記事を例にとり、英文記事のなかで特徴的に使用される特徴語と、特徴語を含む複数の語からなる連語表現に着目する。患者向けの英文記事に頻出する特徴語を歯学 ESP 語彙として抽出したうえで、代表的な歯学 ESP 語彙がどのような語と共起しているかを確認し、連語の形で表現される歯学用語について考察する。さらに、特徴語として抽出された ESP 語彙の語彙レベルに着目し、専門入門期に習得すべき歯学 ESP 語彙はどのようなものであるかを探る。

## 2. 特徴語と共起パターン

特定分野テキストで高頻度に使用される ESP 語彙の選定には、石川 (2004) など多くの研究事例で特徴度 (keyness) に着目した特徴語分析の手法がとられている。特徴度とは、対象コーパスに限って特徴的に頻出する語の特徴性の度合いのことで、対象コーパスと参照コーパスにおける頻度差の顕著性の度合いと説明される (石川, 2008)。参照コーパスと比較して特徴度の高い語が、対象コーパスで特徴的に頻出する特徴語として抽出される。

特徴語の抽出にはいくつかの代表的な統計的指標が用いられる。統計的指標を有効に活用することで信頼性の高い特徴語を簡便かつ高精度に抽出することができ、なかでも、対数尤度比は比較的少ない語数の特徴語抽出が可能で、指標値上位ではかなり効果的に特徴語を判別できる (中條・内山, 2004)。

そこで、患者向けの英文記事に特徴的に使用される特徴語の抽出には、統計的指標として対数尤度比を用いることとする。特徴語の抽出作業には、コンコーダンスと呼ばれるコーパス分析用のソフトウェアを使用することで指定した統計的指標を用いた特徴度が自動で計算され、特徴語を抽出することができる。

また、特定分野で特徴的に用いられる MWE の中でも特に専門用語に着目した場合、有用な共起パターンは名詞句であるという指摘がある (中島, 2021)。歯学用語においても多くが名詞句である。そこで、特徴語を含む複数語のつながりで表現される歯学用語については名詞句に着目し、名詞+名詞の共起パターンと形容詞+名詞の共起パターンで表現される連語表現について抽出することとする。

## 3. 方法

分析の素材とするのは、American Dental Association が発行する *The Journal of the American Dental Association* に掲載された患者向けの英文記事である。乳歯の重要性、齲蝕の予防、歯の痛み、様々な症状とその治療法など口腔の健康に関するテーマが幅広く取り上げられている印象を受ける。このような患者向け英文記事のうち、2018年から2020年にかけて掲載された21本が1冊にま

とめられている (American Dental Association, 2020)。本稿ではこの21本の英文記事を分析素材とした。各英文記事のタイトル部から Conclusion 部までを分析の対象とし、引用リストや脚注は分析の対象外とした。また、分析に使用するコンコーダンスでの処理が適切になされるようにタイトルやサブタイトルなどの大文字の記載を小文字に修正した。以下、この分析対象データを「英文記事テキスト」と呼ぶ。

分析には AntConc (Anthony, 2024) を使用し、統計指標には対数尤度比を指定した。また、特徴語を抽出する際の参照コーパスには AntConc で提供されている American English 2006 (AmE06) を使用した。AmE06は複数のジャンルから集められた約100万語の書き言葉コーパスである。AmE06については Anthony (2024) を参照されたい。

まず AntConc の keyword 機能を使い、分析対象とした英文記事テキストに特徴的に現れる語を対数尤度比に基づいて検出した。さらに、検出された語のなかから固有名詞、代名詞、略称、単位などを削除して残った内容語を英文記事テキストの特徴語として抽出した。

続いて、抽出された特徴語について、語彙的傾向を確認するために語彙レベルを解析した。語彙レベルの解析には New Word Level Checker (NWLC) (Mizumoto, 2021) を使用し、語彙レベルの指標となるリストには大学生レベルの日本人英語学習者が知っている可能性の高い順に約75,000語がリストされた Scale of English Word Knowledge - Japanese (SEWK-J) を指定した。なお、SEWK-Jについては Mizumoto (2021) および水本 (2022) を参照されたい。

さらに、抽出された特徴語のうち特徴度の高い上位語について、特徴語の直前または直後に出現する語を AntConc で検出し、コンコーダンスラインと文脈を参照して歯学用語として使用されていることが確認できたものを連語表現として抽出した。

#### 4. 特徴語と連語表現の抽出結果

分析の対象とした英文記事テキストについて AntConc で分析した結果、総語数は延べ語数 (Tokens) が10,505語、異なり語数 (Types) が1,623語となった。英文記事テキストに特徴的に現れる語として異なり語257語が検出された。そこから、固有名詞、代名詞、略称、単位などを削除した結果、234語の特徴語が抽出された。なお、語のレマ化は行われず、*teeth* と *tooth*、*gum* と *gums*、*brush* と *brushing* などのように語の表記の形が異なれば別の語としてカウントされている。抽出された特徴語について特徴度の高い順に上位30語を表1に示す。

表 1 特徴語の抽出結果

Rank	Type	Keyness (Likelihood)	Rank	Type	Keyness (Likelihood)
1	teeth	876.31	16	rays	181.46
2	dentist	863.28	17	jaw	177.53
3	tooth	631.42	18	antibiotics	175.37
4	dental	591.33	19	risk	173.94
5	fluoride	458.63	20	cancer	161.90
6	gum	336.13	21	brush	156.71
7	oral	308.59	22	disease	156.66
8	mouth	287.51	23	fillings	155.88
9	pain	261.87	24	cause	153.39
10	cavities	257.20	25	gums	147.89
11	decay	233.17	26	erosion	143.13
12	medications	223.84	27	diabetes	141.07
13	help	192.63	28	treatment	130.07
14	toothpaste	183.45	29	seal	127.87
15	sealants	183.39	30	cavity	127.05

AntConcによる検出結果から固有名詞等を除いた上位30語

次に、英文記事テキストから抽出された特徴語について、NWLCを使用して語彙レベルを分析した。特徴語の語彙レベルを表2に示す。なお、NWLCでは語をレマ化して計量する（水本, 2022）ため、異なり語数は196語となった。また、SEWK-JではL1からL6までの各レベルに500語、L7とL8の各レベルに1,000語、L9とL10の各レベルに2,500語がリストされ、L10（1万語レベル）を超える語はOver10にリストされている（Mizumoto, 2021）。

表 2 特徴語の語彙レベル

Word Level	Type	Frequency	%	Cumulative
PropN/Num	0	0	0.00%	0.00%
L1	44	59	25.21%	25.21%
L2	37	45	19.23%	44.44%
L3	23	29	12.39%	56.84%
L4	10	12	5.13%	61.97%
L5	16	18	7.69%	69.66%
L6	5	6	2.56%	72.22%
L7	5	6	2.56%	74.79%
L8	6	6	2.56%	77.35%
L9	1	1	0.43%	77.78%
L10	2	2	0.85%	78.63%
Over10	39	42	17.95%	96.58%
N/A	8	8	3.42%	100.00%
ALL	196	234	100.00%	100.00%

NWLCによる解析結果。Word LevelはSEWK-Jに基づく語彙レベル、Typeは異なり語数、Frequencyは総語数、%は総語数の出現割合、Cumulativeはその累積値。

さらに、特徴語がどのような語と共起して複数語から成る用語として用いられているかを調査するために、特徴度の上位10語に着目し、連語の形で意味のある歯学用語となる連語表現を抽出した。出現頻度が比較的高い連語表現が確認された4語 *tooth*, *dental*, *gum*, *oral* について、分析対象の英文記事テキストから抽出された連語表現を出現頻度の高い順に表3に示す。

表3 英文記事テキストに使用されている連語表現の例

特徴語	連語表現
tooth	tooth decay (28), tooth pain (8), tooth root(s) (4), tooth surface(s) (3), tooth appearance (1), tooth loss (1)
dental	dental erosion (15), dental x-ray (8), dental treatment(s) (6), dental sealants (5), dental product(s) (4), dental care (3), dental office (3), dental pain (3), dental visits (3), dental floss (2), dental filling(s) (2), dental amalgam (1), dental experts (1), dental health (1), dental hygienist (1), dental infections (1), dental professionals (1), dental radiographs (1), dental sensitivity (1)
gum	gum disease (27), gum line (4), gum problems (4)
oral	oral health (18), oral sores (5), oral care (4), oral hygiene (3), oral cancer (2), oral pain (2), oral side effects (2), oral examination (1), oral self-care (1), oral appliance (1), oral bacteria (1), oral development (1), oral diseases (1), oral rinse (1)

( ) 内の数字は英文記事テキストでの出現頻度

最後に、英文記事テキストの中に使用されている特徴語のうち語彙レベルが Over10となる語を抽出した。出現頻度の高い順に表4に示す。

表4 英文記事テキストから抽出された Over10レベルの特徴語

語彙レベル	特徴語
Over10	fluoride (50), sealants (20), erosion (17), enamel (15), denture(s) (13), acetaminophen (12), acidic (11), clench(ing) (9), dentin (9), fluoridated (9), opioid(s) (9), oropharyngeal (9), gingivitis (8), thrush (8), interdental (7), periodontitis (7), amalgam (6), cementum (6), resin (6), composites (5), ionomers (4), obstetricians (4), reflux (4), teething (4), chemotherapy (3), gynecologists (3), ibuprofen (3), moistened (3), radiographs (3), stiffness (3) trimester (3), vaccinated (3), vaccination (3), benzocaine (2), caries (2), connective (2), fluorosis (2), sippy (2), temporomandibular (2)

( ) 内の数字は英文記事テキストでの出現頻度

## 5. 考察

英文記事テキストから特徴語として234語が抽出された。そのほとんどは、表1に示す通り歯科に関連する語と言えそうである。語彙レベルを確認すると、表2に示す通りL3レベルまでの比率が比較的高く、大学入学共通テストレベルとされるL4レベルまでで特徴語全体の61.97%がカバーされる。このL4レベルまでを既習レベルと捉えると、残る38.03%が未習語と考えられるが、なかでも1万語を超えるOver10レベルのカバー率は17.95%でありL3レベルを抜いてL2レベルと同等の比率を占める。

これまでも指摘されているように、特定の分野に焦点を当てるESP教育では、日常語として使用される基本語が分野内では特有の意味を持つ専門用語として用いられていることに注意が必要である(Coxhead, 2017; スミス山下ら, 2015)。一方で、初級レベルと同等の割合を占めている1万語を超えるレベルにも意識を向けた語彙指導が必要であろう。つまり、既習レベルではあるが改めて専門用語としての学習が必要な語と、1万語を超えるレベルであるにも関わらず専門用語としては使用頻度の高い語の両面に注意する必要があることが見えてくる。

次に、英文記事テキストで歯学用語として用いられている連語表現に着目する。表3は、英文記事テキストのなかで出現頻度が比較的高い連語表現が確認された *tooth, dental, gum, oral* の例である。*tooth, dental, gum, oral* と共起して連語表現を作る語には、*pain, root, surface, treatment, care, health, line* など初級レベルの語が確認できる。表3にある共起語の語彙レベルを確認したところ、大学入学共通テストレベルとされるL4レベルまでの語が約75%を占める。一方で、*decay, erosion, sealants, amalgam, sensitivity* などL5レベル以上の語も確認できる。L5レベル以上を高校での学習機会がなかった未習レベルと捉えると、表3にある共起語の約25%が未習語と考えられる。

このような語彙レベルの傾向を示す患者向け英文記事を題材に歯学ESP語彙を習得するとした場合、専門入門期のESP教育ではどのような語彙の習得を目標にすべきであろうか。L4レベルまでの既習レベルと、未習レベルのなかでも語彙出現率の高いOver10レベルに着目して考察を続ける。

上述のように、表3に例示した共起語の約75%がL4までの既習レベルである。連語表現の理解には、高校までに習得した既習語の知識を援用できそうである。既習知識を援用しながら専門用語として改めて導入し、既習の基本語を使って表現できる患者向けの歯学用語としての習得を図ることがひとつの鍵となるであろう。また、分析対象とした英文記事テキストは患者に向けて書かれた英文記事であるため、一般の人が理解できるように日常的な語彙を意識して使用している面も窺える。一般向けに書かれた英文記事を学習教材として活用することは、基本的な既習語の歯学ESPでの用いられ方を知るとともに、患者に合わせた適切な歯学ESP語彙の用い方を習得することにも繋がる可能性が示唆される。

もう一方の課題は、未習レベルのなかでも出現率の高いOver10レベルを含めた未知語の習得であろう。英文記事テキストから抽出した特徴語に占めるOver10レベルの割合は約18%と未習語レベルでは突出している。では、Over10レベルの特徴語とはどのような歯学用語であろうか。表4に英文記事テキストから抽出されたOver10レベルの語を示した。Over10レベルとは、日本人大学生が知っている可能性が高い順に並べた語彙リストにおいて1万語を超えるレベルを意味する。即ち、表4に示した特徴語は日本人大学生が知っている可能性は非常に低いとされるレベルにある。

さらに、特定分野に特化しない一般的な学習語彙リストでは、ここに示した語の多くがリスト対象外となる。従って、これらの語は日本人大学生にとって未知語であるにもかかわらず一般的な語彙学習では習得する機会を得る可能性が低い語であると考えられる。つまり、意識的に導入する必要のある歯学 ESP 語彙であるといえよう。

また、表 4 には借用語（カタカナ語）として用いられる用語が少なからず見受けられる。薬学生を対象にした調査ではカタカナ語で理解している英単語は習得されやすいことが示唆されている（スミス山下ら, 2020）。英文記事テキストの例では, *sealants*, *enamel*, *denture*, *amalgam*, *resin*, *composite*, *caries* などの Over10 レベルの語が見られるが、日本語の用語としてはカタカナ語で用いられることの多いこれらの語の難度は歯学生にとってはそれほど高くはない可能性がある。また、連語の形で学習することで、使用実態に即した歯学表現として効率的に習得することも期待できる。

このように、専門入門期に習得目標とすべき歯学 ESP 語彙は、既習レベルの基本的な語を用いて表現可能な歯学用語と、大学生が知っている可能性が非常に低いとされるレベルにありながら使用頻度の高い歯学用語であると考えられる。

## 6. おわりに

患者向けの英文記事を例に、一般の人に向けて使用される歯学 ESP 語彙について、特徴語と連語表現に着目して分析した。分析対象とした英文記事は一般向けではあるが、1 万語レベルを超える語の出現率は低いとはいえない。歯科医向けの専門誌や歯学論文となればさらに高い語彙レベルが要求されることは想像に難くない。他方、患者や一般の人に向けて発信する際には、学術的な用語の使用を避け、一般の人が理解しやすい歯学 ESP 語彙を用いることが求められるであろう。

専門入門期には、基本的な語を用いて表現される歯学用語を習得するとともに、大学生が知っている可能性が非常に低いとされるレベルにありながら患者に対して頻繁に使用される歯学用語を習得することが望まれる。専門入門期に取り組む歯学 ESP の教材として、患者や一般の人に向けて書かれた英文記事を活用することには意義がありそうである。

本稿で対象とした英文記事テキストは約 1 万語にすぎない。歯学 ESP の使用実態を分析するためには、もっと多くの素材を広く対象にすることが必要と考える。また、将来の論文購読を意識した準備段階として習得すべき歯学 ESP 語彙についても調査分析することが必要であろう。今後の課題としたい。

【参考文献】

- American Dental Association (2020) *JADA+ Tips for Caring for Your Teeth and Mouth: For the Patient Pages*. Retrieved September 26, 2025, from <https://jada.ada.org/pb/assets/raw/Health%20Advance/journals/adaj/onlineissueversion2-1590154327693.pdf>
- Anthony, L. (2024) AntConc (Version 4.3.1) [Computer Software] Waseda University. Retrieved September 26, 2025, from <https://www.laurenceanthony.net/software/AntConc>
- 中條清美・内山将夫 (2004) 「統計的指標を利用した特徴語抽出に関する研究」『関東甲信越英語教育学会研究紀要』 18, 99-108.
- Coxhead, A. (2017) Specialized vocabulary: What the research shows. *ALIS Newsletter*. Retrieved June 14, 2023, from <http://newsmanager.commpartners.com/tesolalis/issues/2017-08-18/3.html>
- 石川慎一郎 (2004) 「司法英語 ESP 語彙表構築の試み：FROWN コーパスと米国司法文献コーパスの比較に基づく特徴語の抽出」『神戸大学国際コミュニケーションセンター論集』 1, 13-27. <https://doi.org/10.24546/00517984>
- 石川慎一郎 (2008) 『英語コーパスと言語教育 データとしてのテキスト』大修館書店
- 小山由紀江 (2015) 「コーパスと EAP/ESP 教育」投野由紀夫 (編) 『コーパスと英語教育』 131-156. ひつじ書房
- 小山由紀江・水本篤 (2010) 「単語連鎖にみる科学技術分野と他分野の英語表現比較」『統計数理研究所共同研究レポート239 ESP コーパスからの特徴表現の抽出』 1-12. <http://hdl.handle.net/10112/12992>
- 宮本祥子・五百蔵高浩・宮本謙三・宅間豊・井上佳和・竹林秀晃・岡部孝生・滝本幸治 (2012) 「理学療法分野における英語表現 - 共起パターン - の特性」『理学療法学』 39(2), 90-101. <https://doi.org/10.15063/rigaku.KJ00008046837>
- Mizumoto, A. (2021) New Word Level Checker [Web application]. Retrieved September 26, 2025, from <https://nwlc.pythonanywhere.com/>
- 水本篤 (2022) 「New Word Level Checker の概要」『メソドロジー研究部会報告論集』 12, 1-24. <https://doi.org/10.69194/methodologysig.12>
- 中島和郎 (2021) 「コーパスデータからのソーシャルワーク ESP 連語表現抽出の試み」『立正大学社会福祉研究所年報』 23, 47-62. <http://hdl.handle.net/11266/00009901>
- スミス山下朋子・天ヶ瀬葉子・野口ジュディー (2015) 「薬学生を対象とした専門用語の理解度調査：種類別対応の必要性」『大阪薬科大学紀要』 9, 13-17.
- スミス山下朋子・天ヶ瀬葉子・山下直子・野口ジュディー (2020) 「意味と発音に焦点を当てた薬学生の専門用語の語彙習得について」『大阪薬科大学紀要』 14, 77-86.

## 体育実技科目における障害理解促進への取り組み

佐藤 紀子

### Initiatives for Promoting Understanding of Disabilities in Physical Education

Noriko Sato

#### 1. はじめに

N大学歯学部では、2003年度より第1学年の体育実技に「アダプテッド・スポーツ」の要素を含んだ学習項目・内容を取り入れている。用具やルール、実施方法を工夫することで全ての人々がスポーツに参加し、能力を発揮できるようになることを受講生が知り、生涯にわたりスポーツに親しむ素養を育成することが目的である。加えて、アダプテッド・スポーツを通して、受講生が障害について理解し、共生社会の実現に寄与できるようになることを意図している。

授業において、受講生はバレーボールという競技を通して、用具やルール、実施方法を変化させることで、対象となる参加者が異なってくることを体験する。その後、視覚障害者（全盲者）がバレーボールを実施するために必要なルール、用具、実施方法の工夫について考える。この一連の授業プログラムの中に障害疑似体験が取り入れられている。授業のまとめとして、ICF（International Classification of Functioning, Disability and Health, 国際生活機能分類）から、アダプテッド・スポーツは、そのスポーツを実施する人の特性（心身機能・構造や個人因子）に用具やルール、方法等（環境因子）を適合させたスポーツであることを理解する。

本稿では障害を理解するための教育プログラ

ムを概観し、その後、N大学歯学部における体育実技での障害理解促進のための取り組みを紹介する。

#### 2. 障害理解教育プログラム

##### (1) 疑似体験

疑似体験とは、目隠しをしたり、車いすを使用したりするなど、身体的、感覚的な障害を模倣する活動（French, 1992）で、しばしば障害理解教育の手法、ツールとして用いられる。

しかしながら、批判的な意見も多い。Frenchは、障害者の困難や問題、能力不足や欠けている部分に焦点を当てることは、障害を理解するには不正確で、障害者の能力を低く見積もるものである。疑似体験は望ましくない固定観念や誤解を生み出すと批判している。中瀬（2024）は大学生に対して、高等学校までに経験した障害理解のための授業内容をどのように感じたのかを調査し、疑似体験の中でも特にアイマスク体験についてネガティブな記述が多かったことを報告している。小野・徳田（2006）は、10分程度のアイマスクを着用した視覚障害歩行シミュレーション（手引き歩行）では、体験者の目が見えないことへの不安や恐怖心を高めるだけになる。そして、そのことが視覚障害者は常に不安や恐怖心と闘う存在であると認識され、

特別視へとつながると指摘する。

一方で、疑似体験によってネガティブな感想やステレオタイプの考えを持ったとしても、気づいたという点で、無関心や気づいていない状態よりは、障害理解は進んだと捉えることができる(山本ら, 2007)という意見もある。しかしながら、疑似体験の内容については、十分な検討が必要である。西館(2005)は疑似体験においては「できない」で終わるのではなく、「どうしたら解決できるか」を体験しなければならないと指摘する。芝田(2013)も、障害者の生活における不便性と困難性を理解すると同時に、それを克服することができる可能性があるというポジティブな側面の理解を目的にした疑似体験には意義があり、疑似体験は視覚障害の理解には不可欠であると述べている。

谷内(2012)は、疑似体験を実施する前に目的の明確化をおこなわずに実施していることが問題だとしている。視覚障害者ガイドヘルパー養成講座における疑似体験が、ガイドヘルパーとして視覚障害者に対する配慮を学ぶことを目的としておこなわれていることを例に挙げ、疑似体験をおこなうことは「目的」ではなく、ガイドヘルパーとしての技術を習得するための「手段」であると指摘している。建築を学ぶ学生が視覚障害疑似体験を通して、自身が設計した住宅作品の問題点を見つけ、改善案を提案できるようになったという報告がある(西尾・中野, 2010)。これは目的を明確にした疑似体験の例であろう。

つまり、疑似体験を障害理解教育に用いる際には、その目的を明確にし、内容と実施方法を考慮することが重要である。

## (2) 社会モデルの理解

国連の障害者権利条約や障害者基本法、ICFは障害の「社会モデル」を取り入れており、現在、障害を理解する上で、社会モデルの視点が主流となっている。

東京2020オリンピック・パラリンピック競技

大会のフィールドキャスト(大会ボランティア)<sup>注1)</sup>に対し、多様性を前提とした共生社会の実現に向けた障害教育・人権教育としておこなわれたのが「障害平等研修」(Disability Equality Training: DET)である。DETでは、障害の社会モデルを障害理解の基礎とすることを特徴としている(久野, 2025)。

障害の社会モデルとそれに対する個人モデルについて、久野(2018)は以下のように説明する。個人モデルは、個人の機能障害が原因で「障害」(差別や不平等、排除や参加制約)が起これるととらえる。「正常」という一定の心身の機能を保持しないことが、課題を引き起こす原因とみなされ、その改善が優先的な解決策となる。一方、社会モデルは、機能障害と「障害」という二つの課題があることは認める。しかし両者の間に原因と結果という関係性はないと考え、「障害」は機能障害によってではなく、多様な人々を考慮しない社会や環境の障壁によって引き起こされると考える。多様性を受け入れるインクルーシブ(包含・包摂的)な共生社会の形成が解決策となる。

久野(2017; 2018)は、障害理解の研修として機能障害の疑似体験だけでは、障害の個人モデルの視点や理解を促してしまい、差別や排除という課題を見えづらくする点に留意が必要だと指摘する。

田中ら(2021)は、障害の社会モデルを土台、基礎として疑似体験・介護体験を実施することで、その経験は環境との関係で理解され、環境の変容や工夫を考案する材料となると述べている。松原・佐藤(2011)も、機能障害のある人々に対して、ある状況が「障害」として出現する場面に実際に寄り添い、その意味づけを相互承認する過程に参加することで、「障害」を疑似経験できるとし、このような障害の「社会モデル」を発見する体験を含むプログラムを「障害協働体験」と名付けている。

### (3) スポーツを通じた障害理解

スポーツを媒体とした障害理解教育の有用性についての言及が散見する。佐藤（2018）は、アダプテッド・スポーツを教材とした授業の後に、大学生の障害者や障害者スポーツに対する興味や関心が高まることを報告している。谷内（2012）は障害当事者とともにおこなうユニバーサルスポーツ<sup>注2)</sup>体験プログラムでは、機能障害によってできないことがルールや用具の工夫によって、できる状態に変わることを学べると指摘し、このようなプログラムは思考・想像力を養うと述べている。また、児童を対象に障害理解教育の系統的なプログラムについて検討した楠ら（2012）も、すべての人が楽しめるユニバーサルデザインのスポーツ等を考えて、実際におこなう思考・活動型の授業がユニバーサルデザインの精神を育てるとしている。

ユニバーサルスポーツやアダプテッド・スポーツは障害理解教育のツールとして有用であることが推測される。

### 3. N大学歯学部第1学年「スポーツ健康科学1」

#### 障害理解のための取り組み

先行研究から、障害理解教育のプログラムと

して疑似体験を取り入れる場合は、目的を明確にすること、「できる」体験あるいは、どうしたら解決できるかを体験できるような内容にすることが必要だといえる。また、障害理解プログラムでは社会モデルの視点を基礎とすることが重要であり、アダプテッド・スポーツやユニバーサルスポーツは障害の理解促進に有用であると考えられる。ここでは、先行研究の知見をもとに構成されたN大学歯学部の「スポーツ健康科学1」の障害理解促進への取り組みを紹介する。

「スポーツ健康科学1」は第1学年前期に開講される体育実技科目である。授業は1学年を2クラスに分け、さらにクラスを2つのグループに分けて実施されている。1グループの人数は35名程度である。年度によって若干の違いはあるが、男女の比率はほぼ半々であり、男女共習で授業がおこなわれる。

表は2025年度の授業スケジュールである。授業は学習項目「健康づくり運動」・「生涯スポーツ」を担当する教員と「アダプテッド・スポーツ」を担当する教員、2名で運営される。

ここで学習項目「アダプテッド・スポーツ」での障害理解のための具体的な取り組みを紹介

表 スケジュール

回	クラスと時間		学習項目	
	5,6限	7,8限	グループ①	グループ②
1	A	B	ガイドダンス	
2	A	B	体力チェックテスト①	
3	A	B	体力チェックテスト②	
4	A	B	健康づくり運動①	アダプテッド・スポーツ①バレーボール
5	A	B	健康づくり運動②	アダプテッド・スポーツ②ソフトバレーボール
6	A	B	生涯スポーツ①	アダプテッド・スポーツ③ふうせんバレーボール
7	A	B	生涯スポーツ②	アダプテッド・スポーツ④視覚障害疑似体験
8	A	B	生涯スポーツ③	アダプテッド・スポーツ⑤ユニバーサルスポーツ
9	B	A	アダプテッド・スポーツ①バレーボール	健康づくり運動①
10	B	A	アダプテッド・スポーツ②ソフトバレーボール	健康づくり運動②
11	B	A	アダプテッド・スポーツ③ふうせんバレーボール	生涯スポーツ①
12	B	A	アダプテッド・スポーツ④視覚障害疑似体験	生涯スポーツ②
13	B	A	アダプテッド・スポーツ⑤ユニバーサルスポーツ	生涯スポーツ③
14	B	A	まとめ	

する。

### (1) 学習項目「アダプテッド・スポーツ」

学習項目「アダプテッド・スポーツ」は用具やルール、方法等を工夫することで、全ての人がスポーツに参加し、能力を発揮できることを経験し、理解すること、アダプテッド・スポーツを通じて障害についての理解を促進することを目的としている。

授業では通常のバレーボール、基礎技術のパスが安全で容易にできるよう工夫されたソフトバレーボール（日本ソフトバレーボール連盟, 2022）、重度の運動機能障害のある人が参加できるように考案されたふうせんバレーボール、下肢障害のある人のためのパラリンピック競技でもあるシッティングバレーボール、視覚に障害のある人のためのフロアバレーボールといった多様なバレーボールを扱う。バレーボールという競技を通し、受講生はトレーニングや練習を積んだ若者、技能や体力の低い人、こども、高齢者、立位でプレイできない人、重度の運動機能障害のある人、視覚に障害のある人がゲームに参加し、能力を発揮するための用具やルール、実施方法の工夫を実際に体験し、アダプテッド・スポーツの考え方を学ぶ。

### (2) 障害理解のための取り組み

障害理解のための疑似体験が第3回目（ふうせんバレーボール）、第4回目（視覚障害疑似体験）の授業で取り入れられている。

#### 1) 第3回目：ふうせんバレーボール

第3回目の授業では、ふうせんバレーボールが教材である。鈴の入ったゴム風船をボールとして使用し、バトミントンのコート（6.10 m × 13.40 m）とネット（1 m55 cm）を用いておこなう。風船は大きく、柔らかく、軽い。また落下速度が遅いという特徴がある。

この風船の特徴を活かしたふうせんバレーボールは重度の運動機能障害のある人が参加できるように考案された競技である。全員参加の

概念がルールに取り入れられ、コート内のプレイヤー全員が風船に触れてから相手コートに返すことを基本としている（ふうせんバレーボール振興委員会, 2025）。

授業では、1チーム6名のプレイヤーがゲームに参加し、全員が必ず1度、しかも1度だけ風船に触れて相手コートに返球するといったルールを基本として、4つの異なるルールでゲームを実施する。

一つ目のルールでは一般的なバレーボールと同様に立位でおこなう。風船の動きに慣れない受講生は最初こそ戸惑いを見せるが、徐々にその特徴を理解してくると、課題の易しさから、退屈に感じている様子を見せることもある。

二つ目のルールでは、全員が臀部を床につけた欠損・切断といった下肢障害の疑似体験といえる状態でプレイする。座位の状態動くことに慣れていない受講生は、立位の時と比べて、風船の落下地点への移動が困難となる。

三つ目のルールは、全員が立位でおこなうが、コート上の2名（前衛左側と後衛中央のプレイヤー）は所定の位置に置かれた直径85 cmのフラフープ内のみ移動できるといった制限を設ける。このルールでは風船を打つ順番を考慮しなくてはならず、1つ目の立位のルールに比べて難易度が増す。

三つ目のゲームを終えた後に、風船に入れられた鈴の理由について、受講生に問いかける。すると、ほぼすべての受講生が、風船の中の鈴は視覚障害者とその位置を把握するためだと回答する。それが正しいかどうかを確認するために、四つ目のゲームでは各チーム2名がアイシェード<sup>注3)</sup>を着用し視覚を制限した状態で、立位でゲームをおこなう。アイシェードをし、視覚障害疑似体験としてゲームに参加した受講生は、コート内に立ち尽くすか、視覚を制限していない他のプレイヤーに風船を身体に当ててもらったり、手を取られ、風船を打たせても

らったりするかのいずれかである。

実際に全盲のプレイヤーが補助者なしで鈴の音を頼りに風船の落下位置に移動したり、風船に手を伸ばしたり、その位置を判断し打ったりすることは困難である。日本ふうせんバレーボール協会（2018）のルールでは、風船を確認できる距離が1 m以下の視覚に障害のある選手には「ブラインドアタック」というルールが適用されている。コート内のプレイヤー全員がボールに触れた後で、重度視覚障害のある選手がボールを補球した時点で、プレイは一度中断され、ボールを補球した選手はアタックライン後方に移動し、そこからアタックをしてプレイが再開されるというものである。



図1 ブラインドアタック  
(北九州市障害者スポーツ協会, 2022)

北九州市障害者スポーツ協会（2022）が作成した動画（図1）からは、アイマスクをした全盲の選手を晴眼者が後ろから誘導している様子が見て取れる。また、ふうせんバレーボール振興委員会（2018）のSNSには、「視覚障害を持つメンバー。ふうせんの中には鈴が入っていますが何より仲間の声かけやタッチが頼りです。」とのコメントも見られる。風船の中の鈴の音は誰かが風船を打った際に音になるため、どのあたりのプレイヤーが風船に触れたかを把握することはできるが、その音を頼りに、能動的・主体的に位置を把握し風船を打つことは困難だといえる。

ふうせんバレーボールでの疑似体験から、受講生は下肢障害のある人は風船を使ったバレーボールならばできる。視覚障害者は鈴の入った風船でも打つことはできず、バレーボールをおこなうことは難しいと捉えてしまうおそれがある。受講生の理解をこの段階でとどまらせないために、第4回目の授業が展開される。

## 2) 第4回目：視覚障害疑似体験

第4回目の授業は、ふうせんバレーボールでの経験を踏まえつつ、アダプテッド・スポーツ、そして障害について正しい理解を深めることを目的とする。

最初に受講生は、主に下肢に障害のある人がおこなうシッティングバレーボールの試合映像を視聴する。この競技では、ボールは通常のバレーボールが用いられる。座位でおこなうため守備範囲を狭くした6 m × 10 m のコート、男子1 m15 cm、女子1 m05 cmの高さのネットを使用する<sup>注4)</sup>。シッティングバレーボールはパラリンピックの競技でもあり、映像では激しいラリーの応酬が展開される。第3回目のふうせんバレーボールにおける座位でのプレイの経験から、立位でプレイできない人は落下速度の遅い風船を用いてバレーボールをおこなう以外の選択肢がないという誤った認識を、受講生に持たせないためにシッティングバレーボールの映像を用いる。トレーニングや練習を積むことで、下肢に障害のある選手が素早くコートを移動し、強いアタックヒットを打てるようになることを受講生は知る。

次に受講生は、重度の運動機能障害のある人たちがふうせんバレーボールを楽しむ映像を視聴する。そして、全盲の視覚障害者が晴眼者の誘導で風船に手を触れさせてもらっている画像（図1）が紹介され、風船の鈴の音を頼りにその落下位置に移動したり、自分から風船に手を伸ばして意図した方向に打ったりすることが困難であること、つまりふうせんバレーボールの

用具, ルールや方法では, 視覚障害者, 特に全盲の人は能力を発揮できないことを再確認する。

その後, 全盲の視覚障害者が自身で判断し, 決定でき, 能力を発揮するための用具, ルール, 実施方法を受講生に考えさせるために, 視覚以外の感覚について説明をおこなう。その際に, 視覚障害疑似体験をツールとして用いる。視覚を制限し(アイシェードを着用し), ペットボトルからプラスチックコップに水を注ぐ体験である<sup>注5)</sup>。受講生は, 聴覚や皮膚感覚の触覚や温度感覚, 深部感覚の位置感覚, 運動感覚, 振動感覚や重量感覚を用いて, ペットボトルの水をコップに注ぐ。深部感覚は筋の収縮や関節の屈伸などによって生じる感覚で, 意識にのぼることがほとんどない。このような視覚以外の感覚を用いることができる用具, ルール, 実施方法にすることで, 全盲者がスポーツに参加し, 能力を最大限に発揮できることを受講生に理解してもらう。

2010年代, N大学歯学部では視覚を制限し, 晴眼者の誘導で歩行する疑似体験を授業に取り入れたことがある。この時, おこなった調査で, 「障害のある人がスポーツ・運動するのは危険である」と考える受講生が授業後に増加した。普段視覚に頼って生活をしている受講生が, 暗闇の中で歩くことによって感じた不安や恐怖が影響したものと考えられる(佐藤, 2012)。この時の反省を活かし, 現在では, 移動を伴う疑似体験を用いないようにしている。

疑似体験後に視覚障害者がバレーボールに参加するための工夫を受講生が実際に考案することで, より理解が深まると思われる。しかしながら, 時間数の都合上, 実施が叶わないため, 視覚障害者が参加する競技の映像を用いる。

まず受講生はボールに金属の粒が入った音の鳴るボールを使用するブラインドサッカーの映像を視聴する。晴眼者のキーパーや敵陣ゴール

裏に位置するコーラーが, フィールドプレイヤーに声や音などで情報を与える。またサイドライン上にフェンスがあるので, それに触れることでプレイヤー自身も立ち位置の判断が可能となる。こういった工夫により, ブラインドサッカーでは, プレイヤーはボールの位置やゴールの方向を自身で判断し, パスやシュートができる。

ブラインドサッカー同様に音が鳴るボール(風船)を用いるにもかかわらず, なぜふうせんバレーボールでは, その位置を判断するのが難しいかを受講生に考えさせる。

ジーニアス英和辞典(南出・中邑, 2023)によると, バレーボールの“volley”は, ボールが地につかないうちに打ち・蹴り返すことを意味している。つまり競技中, ボールはつねに空間で扱われる。一方でサッカーはボールが地を転がる局面が多く, ブラインドサッカーのボールは転がることで音を発生させる。そのため, ボールの位置の判断が可能となる。それに対し, 風船の鈴は空間では音が鳴りにくいため, その位置をとらえることが困難となる。

全盲や弱視の視覚障害者がプレイできるように考案されたのがフロアバレーボールである(全国盲学校フロアバレーボール大会, 2025)。フロアバレーボールの大きな特徴はボールを転がすことである。ゴールボール, サウンドテ-



図2 フロアバレーボール

ブルテニス、グランドソフトボールなどのように視覚障害者がおこなう球技の多くは、ボールを転がすことでその位置を判断できるような工夫がなされている。バレーボールはボールを床に落とすことなくプレイする競技であるという固定観念にとらわれてしまうと、視覚障害者が能力を発揮できるバレーボールは生まれてこなかったと思われる。

全盲者が前衛を担当し、ネット際にしゃがんだ状態で転がるボールの音を聞きプレイし、後衛は弱視者が保有視力を用いて立位でプレイする。ボールは通常のバレーボールが用いられ、弱視者が見やすいように白い色のものを使用するが、音が鳴るような工夫はなされていない。全盲者はボールが床を転がる音からその位置を判断する。前衛の全盲のプレイヤーはボールに触れていない場合にはネットに触れることが許されているため、自身のコート内での立ち位置や身体の向きを確認することが可能となる。また、後衛の弱視選手から相手プレイヤーの動き、ボールが自陣コートに打たれるコースなどの情報が与えられる。

受講生はフロアバレーボールの映像(図2)を視聴し、適切な用具やルール、実施方法が整うことで、全盲の視覚障害者が素早い動きでコート内を走り、守り、アタックヒットを打つことが可能なことを知る。

加えて、視覚障害者のふうせんバレーボールへの参加を否定するものではないことも受講生には伝える。体力や年齢、スポーツに取り組む目的の違いによって、仲間からのサポートや声掛けで楽しむふうせんバレーボールを好む視覚障害者がいることを理解してもらう。

### 3) 社会モデルの理解

第14回目、まとめの授業において、ICFを用いたアダプテッド・スポーツの考え方の説明がおこなわれる。

視覚に障害のある人(Aさん)がバレーボー

ールを実施する際の「障害」について、ICFを用い、解説すると以下のような内容となる。

視覚障害(心身機能・構造障害)のあるAさんは、自分の能力を発揮し、思い切り動けるスポーツがしたいと考えている(個人因子)。一般的なバレーボールの機会が提供された(環境因子)が、空間でボールの位置を把握したり、相手コートに打ち返すことはできず、ゲームに参加することができない(活動制限)。ゲームに参加できないため、Aさんはチームに所属し、キャプテンといったような役割を得ることができない(参加制約)。

一方、視覚に障害のある人の特性に用具やルール、実施方法を合わせたフロアバレーボール(アダプテッド・スポーツ:環境因子)があれば、Aさんはゲームに参加し、思い切り身体を動かすことができる(活動)。Aさんはチームのエースとなり、フロアバレーボールを普及するような役割を得ることができる(参加)可能性がある。

Aさんには機能障害はあるが、視覚以外の感覚を用いることができる用具やルール、実施方法が整備されることで、スポーツに参加することができないという「障害」はなくなることを受講生に伝える。

「スポーツ健康科学1」の障害理解促進の内容は、ここまでであるが、後期「スポーツ健康科学2」において、アダプテッド・スポーツの考え方の復習とともに、障害の個人モデル、社会モデルの考え方を受講生に伝えている。

## 4. まとめ

現在、多くの学生が小中高等学校の段階でなんらかの障害理解教育を受けてきていると考えられる(中瀬, 2024; 庄司, 2013)。しかしながら、佐藤(2021)がN大学歯学部第1学年学生を対象にした調査では、障害の社会モデルの考え方は、入学間もない学生には浸透してい

ないことが指摘されている。本稿では体育実技における障害理解教育の取り組みについて報告した。教育内容・方法の検討のためには、今後、受講生の障害のとらえ方が、授業を受講したことによって、どう変化したかを調査していく必要がある。

庄司(2013)は、障害について学ぶことは、人が多様であることを学ぶことであり、人権を学ぶことである。障害のある人の生き方を考えることは、自己理解を促し、自己実現に向けた発達を促す。その観点から、社会に出る前、自己の生き方の具体的選択の段階にある大学生が、障害理解の学習をおこなう意義は極めて大きいと指摘する。

将来、歯科医師となる学生に対して、今後も、障害理解促進への取り組みを科目の中で継続しておこなっていききたい。アダプテッド・スポーツを通して障害の社会モデルについて理解を促し、受講生自身が、社会や環境の障壁をなくしていく行動の主体になれるよう、体育実技科目の教育内容・方法を検討していききたい。

#### 【注】

注1) 東京都(2022)によると、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会では70,970人のフィールドキャスト(大会ボランティア)が活動した。

注2) 定義はまだ定まっていないが、ユニバーサルスポーツとは、その場にいる人々が年齢や性別、障害の有無、体力や体格の違いによって有利不利が生まれないように工夫された用具やルールを用い、皆が公平に参加できることを目指したスポーツである(佐藤, 2024)。

注3) アイシェードとは、スキーのゴーグルのレンズを黒く塗りつぶし、光が入らない状態にしたものである。視覚障害のある人の球技、ゴールボール等で選手が着用

する。

注4) 通常のバレーボールコートのはしらは9 m × 18 m, ネットの高さは大学生・一般男子で2 m43 cm, 女子で2 m24 cmである。

注5) 第4回目に取り入れている疑似体験として、受講生に二人組を作らせ、アイシェードをつけているパートナーに言葉のみで運動をさせるというような内容も取り入れている。この疑似体験の目的は的確な説明がどのようなものかを受講生が考えられるようになることである。

#### 【文献】

French Sally (1992) Simulation Exercises in Disability Awareness Training: a critique. *Disability, Handicap & Society*, 7 (3): 257-266

小野聡子・徳田克己(2006) 視覚障害歩行シミュレーション体験が体験者の不安、恐怖心に与える影響-障害理解教育の視点から-。障害理解研究, 8: 37-46

北九州市障害者スポーツ協会(2022) ふうせんバレーボール ①ルール解説. 公益財団法人日本パラスポーツ協会. <https://www.youtube.com/watch?v=4QXl734CU7Y> (2025-9-1 参照)

楠敬太・金森裕治・今枝史雄(2012) 児童の発達段階に応じた系統的な障害理解教育に関する実践的研究-教育と福祉の連携を通して-。大阪教育大学紀要 第IV部門, 60 (2): 29-38

久野研二(2017) 障害平等研修(DET). 異文化間教育, 45: 9-18

久野研二(2018) 社会の障害をみつけよう——人ひとりが主役の障害平等研修. 現代書館

久野研二(2025) トピックス~第25回「リハ協

- カフェ」登壇報告〜リハ協カフェ：途上国における障害平等研修の展開. JANNET 障害分野 NGO 連絡会, 258: 2-3
- 佐藤紀子 (2012) 「アダプテッド・スポーツ」の授業が歯学部生のスポーツや障害者に対する意識に及ぼす影響. 日本大学歯学部紀要, 40: 49-56
- 佐藤紀子 (2018) 大学の一般体育実技における「アダプテッド・スポーツ」を用いた授業の教育効果. 総合文化研究, 23 (3): 49-70
- 佐藤紀子 (2021) 歯学部第1学年学生の「障害」との考え方. 日本大学歯学部紀要, 49: 23-29
- 佐藤紀子 (2024) インクルーシブスポーツとしてのボウリングの可能性. 日本大学歯学部紀要, 52: 43-51
- 芝田裕一 (2013) 人間理解を基礎とする障害理解教育のあり方. 兵庫教育大学研究紀要, 43: 25-36
- 庄司和史 (2013) 大学生の障害理解学習について―「特別支援教育の理論」履修前アンケート調査より―. 信州大学人文社会科学研究, 7: 159-173
- 全国盲学校フロアバレーボール大会 (2025) フロアバレーボール. <http://floor-volleyball.com/rule-2/> (2025-9-1 参照)
- 田中恵美子・平井佑典・野澤純子・奥平真砂子・下尾直子 (2021) 障害の社会モデルの啓発・理解促進に向けた授業の開発. 東京家政大学研究紀要, 61 (1): 97-104
- 谷内孝行 (2012) 地域における「障害理解プログラム」の実施に関する一考察. 桜美林論考. 自然科学・総合科学研究, 3: 63-71
- 東京都 (2022) 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会フォローアップ報告書 (全体企画・競技). [https://www.2020games.metro.tokyo.lg.jp/followuphoukoku\\_5\\_zentaikyugi\\_8.1.11.pdf](https://www.2020games.metro.tokyo.lg.jp/followuphoukoku_5_zentaikyugi_8.1.11.pdf), 405 (2025-9-1 参照)
- 中瀬浩一 (2024) 大学生はどのような障がい理解教育を受けてきて、どのように考えたか. 同志社教師教育研究, 2: 34-43
- 西尾幸一郎・中野莉沙 (2010) 視覚障害疑似体験を活用した設計教育プログラムによる教育的効果の検討. 日本福祉のまちづくり学会福祉のまちづくり研究, 13 (1): 1-10
- 西館有沙 (2005) 間違った障害理解教育1-苦勞の強調・安易なシミュレーション体験・美談仕立て-. 障害理解 心のバリアフリーの理論と実践. 徳田克己・水野智美編, 誠信書房, 110-116
- 日本ソフトバレーボール連盟 (2022) ソフトバレーボール入門. <https://japan-softvolleyball.com/information.html> (2025-9-1 参照)
- 日本ふうせんバレーボール協会 (2018) 協会ルール 2018.8.19. <https://nihon-fusen.jimdofree.com/ルール/> (2025-9-1 参照)
- ふうせんバレーボール振興委員会 (2018) Facebook 投稿 2018年11月13日. <https://www.facebook.com/watch/?v=192438444296905> (2025-9-1 参照)
- ふうせんバレーボール振興委員会 (2025) ルール概要. <https://fusenvolley.jimdofree.com/ルール概要/> (2025-9-1 参照)
- 松原崇・佐藤貴宣 (2011) 障害疑似体験の再構成 疑似体験から協働体験へ. ボランティア学研究, 11: 85-98
- 南出康世・中邑光男 (編集主幹) (2023) ジーニアス英和辞典 (第6版). 大修館書店
- 山本壮則・池田聡・永田忍・金森裕治 (2007) 障害理解学習の現状と実践的課題についての基礎的研究. 障害理解学習の現状と実践的課題についての基礎的研究, 30: 33-44

## 日本大学歯学部紀要投稿要綱

平成 12 年 4 月 1 日

平成 15 年 10 月 1 日改正

令和元年 7 月 1 日改正

### 1 本誌の目的

本誌は日本大学歯学部における研究活動の発表報告を目的とし、年 1 回発行する。

### 2 投稿者の範囲

原則として日本大学歯学部所属の一般教育を担当する教員とする。ただし、共同研究の場合はその限りでない。

### 3 投稿原稿の種類

研究論文（総説，原著，短報），研究の紹介・解説などとする。

### 4 投稿原稿の採否等

投稿原稿の採否，掲載順序は編集委員会で決定する。

### 5 著作権

本誌に掲載された論文などの著作権は日本大学歯学部には帰属する。

### 6 投稿原稿の形式と提出先

A 4 判の原稿に横書きとし、原則として MS-WORD 形式で作成したデータを所定の投稿用表紙とともに研究事務課宛に送信する。図表はモノクロのみとする。

提出先：日本大学歯学部研究事務課

E-mail：de.institute@nihon-u.ac.jp

〒101-8310 東京都千代田区神田駿河台 1-8-13

電話03-3219-8060 Fax03-3219-8324

### 7 校正

校正は著者が行う。印刷上の誤り以外の加筆訂正は認めない。

### 8 その他

本要綱によらない事項および要綱の改正は編集委員会で決定する。  
本要綱の改正は編集委員会で行う。

日本大学歯学部紀要編集委員会

委員長 中野善夫

副委員長 田嶋倫雄

委員 藤田智史 佐藤紀子 鈴木秀則 上原 任

三澤麻衣子 土井 茂

幹事 佐賀友美 原田悠菜

日本大学歯学部紀要

非売品

第53号 (2025)

令和7年12月14日 印刷

令和7年12月24日 発行

編 集 日本大学歯学部紀要編集委員会

発 行 日本大学歯学部  
〒101-8310 東京都千代田区神田駿河台1-8-13  
電 話 03 (3219) 8060 (研究事務課)  
E-mail: de.institute@nihon-u.ac.jp

印 刷 所 ヨシダ印刷株式会社  
〒130-0014 東京都墨田区亀沢3-20-14

© 2025 Nihon University School of Dentistry

複製される方へ

日本大学歯学部では、複写複製、転載複製及び AI 利用に係る著作権を一般社団法人学術著作権協会に委託しています。

当該利用をご希望の方は、(社)学術著作権協会 (<https://www.jaacc.org/>) が提供している許諾システムを通じてご申請下さい。

How to Obtain Permission

Nihon University School of Dentistry authorized Japan Academic Association For Copyright Clearance (JAC) to license our reproduction rights, reuse rights and AI ML rights of copyrighted works. If you wish to obtain permissions of these rights in the countries or regions outside Japan, please refer to the homepage of JAC (<http://www.jaacc.org/en/>) and confirm appropriate organizations to request permission.

**Transactions of**  
**NIHON UNIVERSITY SCHOOL OF DENTISTRY**

No. 53 (2025)

**NIHON UNIVERSITY SCHOOL OF DENTISTRY**